

ビデオアートプログラム

A Window to the World: 世界に開かれた映像という窓

第31回: コレクティブ\_\_ファクト 第32回: グレタ・アルファロ

新しい映像表現に触れることができる無料プログラム

「A Window to the World: 世界に開かれた映像という窓」は、館内の無料スペースで、世界で活躍するアーティストたちによる映像作品を紹介するプログラムです。映像が映し出されるスクリーンを、距離的な隔たりを超えて世界で繰り広げられる試みと私たちとの回路を開く「窓」にたとえ、年間を通して先鋭的な表現を紹介しています。

第31回: コレクティブ\_\_ファクト

●上映期間/ 2013年1月26日(土) ~ 3月17日(日)

●上映作品/ 事の成り行き 2011年 HDビデオ、サウンド、9分30秒

ロンドン自然史博物館に集う人々を観察し、彼らの予期できない行動を撮影した映像《事の成り行き》(The Course of Things)は、巧妙な仕掛けによってドキュメンタリーではなくフィクションとして提示されます。ひとつは、物語を導くイギリス生まれの映画監督アルフレッド・ヒッチコックによるナレーションです。『ヒッチコック劇場』と題されたテレビ番組から抜粋された言葉は周到に編集され、サスペンス・ドラマの極意を語ります。さらに映画的カメラアングルやズームアップで捉えられた映像、BGMとして挿入される音楽といった仕掛けにより、博物館は舞台へ、来館者たちは役者へと仕立てられ、ひとつのサスペンス劇が形作られます。現実とフィクションの間の境界を行きつ戻りつしながら、《事の成り行き》は日常がドラマよりもドラマティックであり得ることをユーモラスに示します。

コレクティブ\_\_ファクト

2002年、アンヌロー・シュナイダー(1979年、スイス、ヌーシャテル生まれ)とクロード・ピゲ(1977年、スイス、ヌーシャテル生まれ)のユニット。ロンドンとジュネーヴを拠点に活動し、主に映像を制作する。既存の物語を解体し、再構築、再編集することで別の物語や意味を付与するという手法で、映像における物語の可能性を追求する。書物や資料などから引用された文章の断片、音楽の一部、記憶や現実といった要素が重層的に入り組んだコレクティブ\_\_ファクトによる作品は、コラージュ的映像と言えるだろう。

第32回: グレタ・アルファロ

●上映期間/ 2013年3月19日(火) ~ 5月12日(日)

●上映作品/ イン・プレイズ・オブ・ザ・ビースト 2009年 シングルチャンネルHDビデオ、サウンド、14分58秒

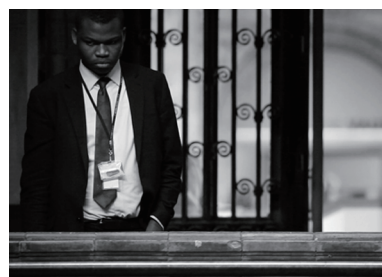
自然に生きる野獣たちを祝福して森の中に置かれた華やかなケーキ。しかし、あらわれた野獣であるイノシシたちは、祝福の意味どころか、ケーキが食べ物であるということすら理解せず、踏みつけ、破壊し、泥遊びをするかのように体をすりつけ始めます。観る人によっては、そのイノシシの姿は醜悪とも、あるいはかわいらしくともうつるでしょう。野獣は多くの寓話や物語の中で、醜く、無秩序な存在として描かれます。しかし、自然の中で暮らす彼等にとって、人間が作りだしたイメージはそもそも無関係のもの。ケーキを与える人間こそが奢った存在であるとも言えます。同じ動物であるはずの人間は現在、大量消費による自然破壊や環境汚染など、様々な問題を抱えています。本当に野蛮なのは野獣なのか人間なのか。ケーキが無邪気に遊ぶイノシシたちの姿を通して、我々に問いかけています。

グレタ・アルファロ

1977年スペイン北部の歴史的な都市パンプローナで生まれる。2001年バレンシア工科大学芸術学部卒業、2011年英国王立芸術大学院写真修士取得。ロンドン在住。宗教や土着の神話・寓話等をモチーフとし、秩序や倫理の本質について問いかける。写真、映像、インスタレーションなど多岐にわたる形態で作品を発表している。2010年に「ブルームバーグ・ニュー・コンテンポラリーズ2010」に選出、2012年にはジェネシスファウンダーションの助成により個展「A Very Crafty and Tricky Contrivance」(ロンドン)を開催するなど、若手作家として注目されている。



会場風景



コレクティブ\_\_ファクト  
《事の成り行き》  
2012年



グレタ・アルファロ  
《イン・プレイズ・オブ・ザ・ビースト》  
2009年

## 上映作品：解説テキスト

### コレクティブ\_\_ファクト：日常はドラマのごとく

たとえば待ち合わせをしている時、なんとはなしに道行く人々を眺めていると妙に気になる動きの人を見つけ、その人物がなにをしようとしているのかを勝手に想像してみる。おそらく多くの人はこうした人間観察のような行為に興じた経験があるのではないだろうか。実に他人の行動は興味深く、謎に満ちている。コレクティブ\_\_ファクトは、ロンドン自然史博物館に集う人々を観察し、彼らの予期できない行動を撮影する。しかし、いくつかの仕掛けによって映像《事の成り行き》は、ドキュメンタリーではなくフィクションとして提示される。

ひとつは、映像の冒頭から始まるナレーションである。声の主は、数々のサスペンス映画を生み出したイギリス生まれの映画監督、アルフレッド・ヒッチコック。『ヒッチコック劇場』と題されたテレビ番組から抜粋されたヒッチコックの言葉は、ある殺人事件が起こり、犯人が特定され逮捕に至ったことを解説し、そしてこの種の事件にしばしば込められる教訓を導き出す。言わばサスペンス・ドラマの極意をレクチャーしたこれらの台詞は慎重に選び出され、鑑賞者をミステリーに誘うべく編集される。映画的カメラアングルやズームアップで捉えられた映像、ナレーションに連動させた周到な編集も重要な仕掛けとなる。博物館を訪れた人々や職員たちは、本来ならばお互い何の関係も持たないにもかかわらず、気づかないうちに物語の中では警戒する／される立場となり、また、追跡する／されているかのように見えてくる。さらに、BGMとして挿入される音楽もこのスリリングな物語の展開に欠かせない。これらの仕掛けによって博物館は舞台へ、来館者たちは役者へと仕立てられると同時に、まったく別の状況にいる人々の表情や動きを、用意された物語に相応しく解釈しようとする鑑賞者の想像力が相まって、ひとつのサスペンス劇が形作られる。

現実とフィクションの間の境界を行きつ戻りつしながら、《事の成り行き》は日常がドラマよりもドラマティックであり得ることをユーモラスに示す。(角 奈緒子)

### グレタ・アルファロ：豚から見た真珠の意味

雪が降りしきる夜の闇の中に、スポットライトに照らされた巨大なケーキの姿が浮かび上がる。かわいらしく装飾されたケーキは、捨てられているのか、それとも食べてくれる誰かを待っているのか、場違いな森の中で鎮座し続ける。しばらくすると、闇の中からケーキの周りをうごめく黒い影が現れる。光を警戒しているのか、まるで恐怖映画のように、はっきりとした姿を見せないまま、影はケーキの周囲を徘徊し続ける。

作者のグレタ・アルファロは、スペイン北部の歴史的な都市パンプローナで生まれ育つ。ローマ帝国、フランス、バスクなど様々な国や民族の文化的影響が残るこの都市の記憶から、彼女は宗教や土着の神話・寓話等をモチーフとした作品を多く発表している。とりわけ、彼女の作品の中には、食物や動物が頻りに登場する。何をどのように食べるかは、信仰する宗教や生まれた土地の慣習などに大きく影響を受けるものであり、「In Praise of the Beast」に登場するケーキは、誕生日などの祝祭の場で饗される、まさに「文化的な」食物の象徴である。一方で野生の動物は、神話や寓話の中では、無秩序で、汚らわしく、醜い存在として描かれる。そのようなイメージからか、彼らの多くは現実の世界でもあまり好かれる存在ではない。

映像の中盤、光の中に姿を現した野獣たちが、いとも簡単にケーキを踏みつぶし破壊していく姿は、一見、醜悪で暴力的なものとしてうつる。しかし、最初の嫌悪が過ぎると、次に現れるのはなんとも言えないおかしみである。2匹の野獣—イノシシたちは、面白いものを見つけたかのように、ケーキへ突進し、体にクリームをすりつけ戯れている。その姿はかわいらしくもある。豚に真珠のことわざ同様、イノシシたちは、施しを施しとわからない、野蛮な存在のようにも思えるが、見方を変えれば、ケーキこそが畜った人間の象徴のようでもある。巨大なケーキを壊して遊ぶイノシシの姿は、消費ばかりを増大させる現代社会への反抗とも、文化的なものばかりにとらわれて自然の姿を忘れてしまった人間への警告とも受け取れる。(山下樹里)

過去の「A Window to the World」

第30回：ジョウ・タオ



2012年11月20日(火)  
～2013年1月14日(月・祝)  
ニューヨーク時間(2009年)、サ  
ウス・ストーン(南石)(2010-11年)

第29回：ハーリド・ハーフィズ



2012年9月19日(水)  
～11月18日(日)  
2011年2月11日：ビデオ・  
ダイアリーズ(2011年)

第28回：スツティラット・  
スババリンヤ



2012年7月18日(水)  
～9月17日(月)  
シューティング・スターズ  
(2010年)

第27回：シャハール・マークス



2012年5月15日(火)  
～7月16日(月)  
1,2,3, Herring(2011年)

■第26回：スミルハン・ラディック

2012年2月7日(火)～4月22日(日)  
オレンジ・ノイズ(2009年)

■第25回：ラリッサ・サンスール

2011年11月29日(火)～2012年2月5日(日)  
スペース・エクソダス(出宇宙記)(2009年)

■第24回：山本篤

2011年9月21日(水)～11月27日(日)  
2 dogs(2010年)

■第23回：田村友一郎

2011年7月12日(火)～9月19日(月)  
NIGHTLESS(2011年)

■第22回：シンシア・マルセル

2011年4月26日(火)～7月10日(日)  
クルザーダ(2010年)

■第21回：佐藤義尚

2011年3月8日(土)～4月24日(日)  
papers digital version(1991/2003年)、desktop(2005年)、  
patterns(2009年)

■第20回：スキ・チャン

2011年1月18日(土)～3月6日(日)  
スリープ・ウォーク・スリープ・トーク(2009年)

■第19回：マイケル・ベル＝スミス

2010年11月23日(火)～2011年1月16日(日)  
セルフ・ポートレート・ニューヨークシティー(2006年)、オン・ザ・グリッ  
ド(2007年)、ビルディング・アクロス・フロム・グリッター・バンド(2008  
年)

■第18回：チョイ・カ・ファイ

2010年10月5日(火)～11月21日(日)  
矩形の夢、シングルチャンネル・バージョン(2010年)

■第17回：ジアッド・アンタール

2010年8月24日(火)～10月3日(日)  
トルコ行進曲(2006年)、WA(2004年)、タンブーロ(2004年)

■第16回：崔廣宇(ツイ・クァンユー)

2010年7月6日(火)～8月22日(日)  
ショートカット・トゥ・ザ・システムティック・ライフ：シティー・スピ  
リッツ(2005年)、不可視の都市：タイパリ・ヨーク(2008年)

■第15回：辻直之

2010年5月25日(火)～6月20日(日)  
3つの雲(2005年)

■第14回：トロピヨロン・ロッドランド

2010年3月13日(土)～5月9日(日)  
132BPM(2005年)

■第13回：ニーナ・フィッシャー、マロアン・エル・サニ

2010年1月16日(土)～2月28日(日)  
暗黒郷を綴る(2008/09年)

■第12回：ヤエル・バルタナ

2009年11月17日(火)～2010年1月15日(金)  
震える時(2001年)、宣言(2006年)

■第11回：オルガ・チェルヌイシヨーフ

2009年9月15日(火)～11月15日(日)  
列車(2003年)、楽しい夢(2005年)

■第10回：トロマラマ

2009年7月18日(土)～9月13日(日)  
セリガラ・ミリシャ(2006年)

■第9回：ジョルディ・コロメール

2009年5月23日(土)～7月17日(金)  
アナーキテクトン(バルセロナ、プカレスト、ブラジリア、大阪)(2002-04年)

■第8回：ホ・ツ・ニエン

2009年3月14日(土)～5月10日(日)  
ポヘミアン・ラブソティ・プロジェクト(2006年)

■第7回：ブルースープ・グループ

2009年3月3日(火)～4月19日(日)  
出口(2005年)

■第6回：ミッチェル・ローズ + BodyVox

2009年1月27日(火)～3月1日(日)  
現代の白昼夢：ディア・ジョン(2001年)、現代の白昼夢：中空の鳥々、  
(2001年)

■第5回：榊原澄人

2008年12月16日(火)～2009年1月25日(日)  
浮楼(2005年)

■第4回：シガリット・ランダウ

2008年11月1日(土)～12月14日(日)  
Phoenician Sand Dance(2004年)

■第3回：田口行弘

2008年9月17日(水)～10月31日(金)  
Moment-performative Installation- / Moment-performative  
installation-(2007年)、Moment-performatives spazieren- /  
Momena-performarive wandering-(2008年)、Ordnung / Order  
(2008年)

■第2回：ロイック・ストラニー

2008年8月5日(火)～9月15日(月・祝)  
現土地調査(2005年)、神様の味(2008年)

■第1回：シンイル・キム

2008年6月28日(土)～8月3日(日)  
ドア(2003年)、球体(2003年)、アクション(2004年)